

授業研究論文

小学校高学年道徳授業案 「なくなった人と私たちの関わりを考える」

宮崎 正康*

Class Plan of our relationship with the deceased

MIYAZAKI Masayasu

The purpose of this paper is to help primary school children feel a relationship with the deceased.

I believe that the theme of moral education is important. I do not think that the deceased should simply be forgotten. However, for elementary school children, the themes of death and the deceased, or discussions or thoughts about them, seem to lie heavily on the minds of children. Therefore, in this morals class, I want to present these topics as lightly as possible.

In the first half of the class for elementary school children, I would like to examine the relationship between children and historical figures. In the second half, I would like to consider the relationship between children and their pets that have died.

The last question of the class concerns the destination of a dead pet. Diverse responses relating to morals or religion are expected. Children are thought to have their own ideas, all of which I would like to acknowledge.

キーワード：なくなった人、かわり、なくなったペット、歴史上の人物、悼む

Keywords：deceased, relationship, lost pet, historical figures, mourn

* 東洋英和女学院大学 国際社会学部 教授
Professor, Faculty of Social Sciences, Toyo Eiwa University

1 この授業について

この授業は、小学校5年生後半～6年生の児童を対象に考えている。

この道徳授業で小学校高学年の児童に考えてもらいたいことは、なくなった人と私たちとのかわりである。

筆者は、このテーマを大切なことと考えていて、なくなった人を単に忘れ去れば良いとは思っていない。しかし授業としては、難しい意味づけを考えるのではなく、できるだけ軽く進めたい。

授業の前半は、過去の人・歴史上の人物と私たちのかかわりを考える。後半は、なくなったペットとのかかわりを考える。

「小学校新学習指導要領・生きる力・第3章道徳」の「第5学年および第6学年」において、次のような記述がある。「3. 主として自然や崇高なものとのかわりに関すること。(1)生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重する。」「4. 主として集団や社会とのかわりに関すること。(7)郷土や我が国の伝統と文化を大切に、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心をもつ。」

「歴史上の人物」とは、この学習指導要領が述べる「先人」であり、先人（歴史上の人物）の努力で残されてきた「郷土や我が国の伝統と文化」などと私たちのかかわりを考えるなかで、自然に先人への敬愛の思いや、「郷土や国を愛する心」が生まれてくることを期待したい。

またなくなったペット（擬似的な家族）と私たちのかかわりを考える中で、自然に「生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重する」ことを感じさせたい。

なお、ペットと児童とのかかわりは、表面的には分からなくても、深い場合がある。軽く進めるとしても、この授業には、学校カウンセラーの先生に参観をお願いして、万が一、動揺する児童が出た場合、フォローしてもらおう体制をとっておくことが必要と思われる。

なお、ペット・ロス（ペットをなくしたことにより、深い悲しみに陥ること）や対象喪失に関しては、以下の書物を参照。

森省二『子供の対象喪失—その悲しみの世界』（創元社、1990年）

小此木啓吾『対象喪失—悲しむということ—』（中公新書、1992年）

また、なくなった人（死者）との関わりを考えることについては、以下の書物を参照。

末木文美士『現代仏教論』（新潮新書、2012年）

同『仏教と倫理』（ちくま新書、2006年）

天童荒太『悼む人（上）（下）』（文春文庫、2011年。初出は『オール讀物』2006年10月号—2008年9月号）

2 本時のねらい

この授業のねらいは、①過去の人・歴史上の人物の活躍のうえに、現在の私たちがあること。すなわち過去の人や歴史上の人物という「なくなった人」と現在の私たちは、かわりがあることを、児童に感じさせること。②「なくなった」ペット（擬似的な家族）と私たちは、おおくのかわりがあることを、児童に感じさせること、以上の2点である。

ひとつにまとめるなら、「なくなった人」と私たちはかわりがあることを感じさせることが、この授業のねらいである。

3 授業の展開

授業の展開とともに、使われている教育技術や教育的配慮について述べていく。

授業が始まると、授業ノート（B4の白い用紙、本稿では省略）を配布する。次の発問を行う。

発問1 昔になくなった人、歴史上の人物というと、誰の名前が浮かびますか。

指示1 授業ノートの A の枠に、名前と、何をした人か、書きなさい。名前だけでもかまいません。3分間です。

教師は、机間指導する。書いていない児童があれば、「昔の武士とか侍とか思い出さない?」「昔の科学者とか思い出さない?」「昔の漫画家とか思い出さない?」とか、児童の得意分野にあわせてたずねる。児童が誰かの名前を言えば、「その名前を書けばいいね」という。教師は教えない。

3分後。次の指示を行う。

指示2 学習班になりなさい。

4人の学習班になる。クラスの人数の関係で、5人の学習班でも、6人の学習班でも良い。

指示3 学習班で意見交換しなさい。

新しい名前が出たら、授業ノートの B の枠「友だちの意見」のところに、書き加えなさい。

それぞれの人物が何をした人か、学習班で確認して、名前のあとに書きなさい。何をした人かよく分からなければ ? と書きなさい。5分間です。

次の指示は、学習班での意見交換のルールとして、普段から周知させておく。

指示4 友だちの意見を否定してはいけません。友だちの意見を大切にしなさい。

自分の意見を取り下げて、友だちの意見に乗り換えてはいけません。自分の意見を大切にしてください。

学習班で意見をまとめてはいけません。

友だちの意見も、自分の意見も大切に意見交換してください。

教師は、机間指導する。悪ふざけをしている児童には、授業に集中するよう注意する。

意見交換が止まっている学習班には、「昔の武士とか侍とか、思い出さない?」と聞いてみる。だれかが名前を言えば、「その名前を書けばいいね」という。さらに「昔の科学者とか、昔の漫画家とか、分野ごとにみんなで思い出してみると良いよ」という。教師は教えない。

5分後に挙手発言を求める。個別指名や列指名を混ぜても良い。児童の発言は、名前とともに板書する。板書は、授業ノートにすばやく書き写すことをルールとしておく。

(予想される児童の発言)

- ・織田信長 日本統一、武士
- ・徳川家康 日本統一、江戸幕府を開く、武士
- ・野口英夫 科学者
- ・豊臣秀吉 日本統一、武士
- ・坂本龍馬 明治維新を進める、武士
- ・手塚治虫 漫画家
- ・夏目漱石 小説家
- ・卑弥呼 邪馬台国の女王 etc.

児童の発言が止まれば、次の発問を行う。

説明1 これらはみんな、なくなっている人物ですね。

発問2 もうなくなっているのだから、今の私たちとは関係は無いですね。どう思いますか。

指示5 授業ノートの C の枠に自分の考えとその理由を書きなさい。2分間です。

教師は、机間指導して、児童全員が自分の考えを書いていることを確認する。書けていない児童には、例えばマンガが好きな児童なら、「手塚治虫」を指さして、「手塚治虫のマンガやアニメを見たことがある？」と聞く。児童が「ある」と応えれば、「じゃあ、あなたと手塚治虫は関係が？」と聞く。児童が「ある」と応えれば、「そのことを書けばいいね」と指示する。

2分後、次の指示を行う。

指示6 学習班で、さっきと同じように意見交換しなさい。

友だちの意見は、授業ノートの D の枠「友だちの意見」のところに、書き加えなさい。

4分間です。

4分後に挙手発言を求める。個別指名や列指名を混ぜても良い。児童の発言は、名前とともに板書する。板書は、授業ノートにすばやく書き写すことをルールとしておく。

(予想される児童の発言)

- ・手塚治虫のマンガを読んだことがある。面白かった。だから関係がある。
- ・織田信長や豊臣秀吉や徳川家康は、戦国時代を統一した。統一しなければ、今も戦国時代だから、今の統一した平和な日本はない。だから今の自分と関係がある。
- ・坂本龍馬は、明治の開国に力を尽くした。あのときに開国がなければ、今の発展した日本は無いだから関係がある。 etc.

関係が全く無いという発言は少ないと予想される。

ただし、関係が全く無いという児童の発言があれば、否定しないで、そのまま受け止めて板書する。児童の発言が止まれば、次の発問を行う。

質問1 みなさんのペットで、なくなってしまったというペットはいますか。このクラスにいない知り合いや友だちのペットでもかまいません。

指示7 授業ノートの E の枠に書きなさい。1分間です。

教師は机間指導をする。書けている児童を確認する。1分後に挙手発言を求める。書けている児童に対する個別指名を混ぜても良い。板書をせず、応答する。あまり時間をとらない。

(予想される児童の答えと応答)

- ・ねこが死んだ。

T: そうか。死んじゃったか。大事にしてたんだ。 P: うん、可愛かった。

T: ねこの名前は? P: ○○○

- ・犬が死んじゃった。

T: そうか。大きい犬? 小さかった? P: すごく大きい犬。

T: それはすごい。散歩に連れてったかい。 P: 大きいので、散歩はお父さん。僕は

後からついてった。

- ・ 親戚のいとこの文鳥が死んじゃった。

T: どうか。どんな文鳥?

P: 白くてすべすべで暖かかった。抱かせてもらったことがある。

T: いとこはどんなふうに話していた?

P: 携帯で話が止まらなかった。

- ・ ペットは飼ってない。飼いたいけれど。

T: どんなペットが飼いたい?

P: 小さい犬が好き。

- ・ ねこがいるけれど、まだ生きてる。 etc.

少し応答して、児童のペットとの思い出を発言してもらおう。教師は、やさしく受容しながら児童と対話する。

説明 2 ペットがなくなっている場合を考えます

発問 3 もうなくなっていますが、今の私たちと関係は無いのでしょうか。どう思いますか。

指示 8 授業ノートの F の枠に自分の考えとその理由を書きなさい。

ペットを飼っていない人も、ペットが活着ている人も考えてください。

2分間です。

教師は机間指導をする。書けている児童を確認する。2分後に挙手発言を求める。書けている児童に対する個別指名を混ぜても良い。児童の発言は、名前とともに板書する。板書は、授業ノートにすばやく書き写すことをルールとしておく。

(予想される児童の発言)

- ・ かわいいねこだった。今も悲しい。だから関係がある。
- ・ 忘れかけていたけれど、今、急に飼っていた犬のことを思い出した。とてもなついていた。僕が帰ると飛びついてきた。もちろん今の自分と関係がある。
- ・ 私も、お母さんも、お父さんも、妹も悲しんだ。だから私の家族全員と今も関係がある。
- ・ ペットは飼っていないけれど、亡くなったら悲しいし、いつまでも忘れないと思う。 etc.

児童の発言が止まれば、次の発問を行う。

(残りが10分を切っていれば、授業を打ち切ってまとめを書かせる。次の発問はまとめとする。)

発問 4 なくなったペットはどこに行けば、私たちは安心ですか。

指示 9 授業ノートの G の枠に書きなさい。2分間です。

(時間があれば、学習班での意見交換を入れる。2分間)

教師は机間指導をする。書けている児童を確認する。2分後に挙手発言を求める。書けている児童に対する個別指名を混ぜても良い。児童の発言は、名前とともに板書する。板書は、授業ノートにすばやく書き写すことをルールとしておく。

(予想される児童の発言)

- ・ 土に帰る。自然に包まれる。それで良いと思う。
- ・ お墓を作ってあげたので、あのお墓にいれば安心。
- ・ 天国。 ・ 私の家族の近くにいつもいてくれると思うので安心。
- ・ 私のこころのなかにいるので、安心している。 etc.

残りが10分を切っていれば、次の指示を行う

指示10 授業ノートのまとめの枠に、次の事を考えながら、まとめを書いて提出しなさい。

- ①友だちの意見を振り返りながら、今日の授業の自分の感想を書きなさい。
- ②自分の意見が変わった場合は、変わった内容と、その理由を書きなさい。
- ③なくなったペットはどこに行けば、私たちは安心ですか、書きなさい。

児童の「まとめ」のいくつかを、学級通信にのせて、後に配布する。

4. おわりに

「歴史上の人物」にかんする発問2と、「なくなったペット」にかんする発問3は、少し違うことに注意する。「なくなったペット」についての授業部分は、教師は、やさしく受容的に進めることが大切である。

この道徳授業案では、「なくなった家族や親戚の方」では無く、「なくなったペット」という「擬似的な家族」のことを児童に考えさせた。

家族や親戚の死では、授業が重くなりすぎるし、児童に与える影響が大きすぎると思う。

「なくなったペット」についても、深いペット・ロス症候群の症状にある児童がいる場合には、この授業は行わず、学校カウンセラーなどと対応を考える必要があると思われる。

また大きな事件や災害などが起きて、その記憶が生々しい時期にも、この授業はひかえるのが良いと思われる。

「なくなったペット（擬似的な家族）」を考えるこの道徳授業が、いつか訪れる家族や親戚などの死に対する心構えを整理する助けのひとつになるかもしれないと期待している。

この道徳授業は、学年に合わせて修正すれば、中学生にも高校生にも、授業できると考えている。

最後に、授業をまとめないようにしたい。児童ひとりひとりが自分の考えを持つことを求めたい。

また最後の「なくなったペットはどこに行けば、私たちは安心ですか」という発問に対する児童の発言（感想）は、道徳的な内容や、宗教的な内容など多様なものを含むと予想される。児童の発言（感想）のすべてを受容したい。

後注：ペット・ロスや対象喪失に関して、小島潤子（東京国際大学大学院臨床心理コース修了生）から情報提供を受けました。記して感謝いたします。ただし本稿の内容については、すべて宮崎正康に責任があります。